

蝦と蟹

—切手をめぐるその自然誌

大 森 信



大森 信（おおもり まこと）

1937年、大阪府生まれ。1960年、北海道大学水産学部卒業。米国ウズホール海洋研究所およびワシントン大学留学後、東京大学海洋研究所、カリフォルニア大学スクリップス海洋研究所、国連教育科学文化機構（ユネスコ）自然科学局を経て、現在、東京水産大学勤務。水産学博士。専攻生物海洋学。著書に *Methods in Marine Zooplankton Ecology*（ニューヨーク、ジョンワイレイ社刊）など。学術雑誌 *Marine Ecology Progress Series*（西独）、*Journal of Plankton Research*（英国）、日本海洋学会誌などの編集委員。

世界に知られるプランクトン研究の第一人者であるが、時にはアルプスの岩峰や氷河を歩き、南海のさんご礁でダイビングを楽しむ自然愛好者でもある。1984年には海鷹丸（東京水産大学）による南極海調査に参加した。

蝦と蟹——切手をめぐるその自然誌

1985年3月30日 初版第1刷発行

著者 大森 信

発行者 佐竹久男

発行所 恒星社厚生閣

〒160 東京都新宿区三栄町8

03-359-7371 振替東京0-59600

広研印刷株式会社・風林社塚越製本

ISBN 4-7699-0528-9 C0045

発光生物

Luminous Organisms

羽根田弥太著

(A5判・336ページ・カラー口絵8丁 ¥6200)

生物界の不思議といわれる発光する動・植物の種類は多い。魚類をはじめ、イカ、エビ、プランクトン、微生物からホタルなどの昆虫、キノコ類と多岐に亘る。

発光魚研究の第一人者羽根田博士が、研究一途50年の研究成果を集成されるもので、発光生物の分類の分布・生態・生化学から研究エピソードまでを含む。

低酸素適応の生化学

ホチャチカ著・橋本・阿部・渡部訳 比較生理学と生化学の視野から酸素なき世界に生きる生物の戦略を探る。¥2500

浮魚資源〔新水産学全集⑨〕

川崎 健著 アジ・サバ・イワシなど浮魚の資源の変動と生態学の基礎に基づき検討し、管理論を展開。 ¥3800

底魚資源〔新水産学全集⑩〕

青山恒雄編 移動性のない底魚の資源管理の問題を、海域別に取上げ、今後の方策を検討する。 ¥3800

海洋の生物過程

丸茂隆三編 海洋の生産力を如何に攔み、再生産力を助長するかの方策を生物学と海洋工学の側面より検討。 ¥8500

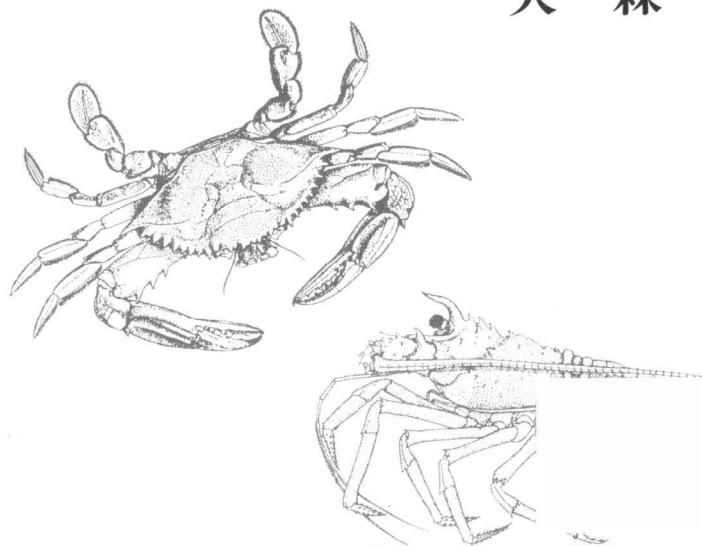
東京都新宿区三栄町8 / Tel 03・359・7371

恒星社厚生閣

蝦と蟹

——切手をめぐるその自然誌

大 森 信



恒星社厚生閣

Natural History of Crustaceans on Postage Stamps

M. Omori

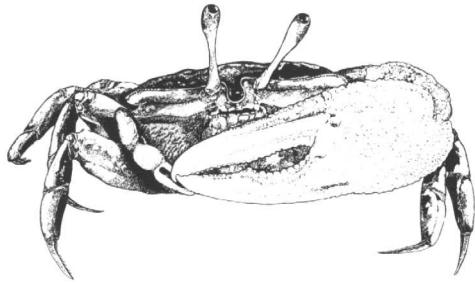
はじめに

甲殻類は動物界の中で最も繁栄をしている節足動物門の中で、昆虫類に次いで重要な一群である。水生動物としては、貝類のつぎに種類が多く、現在生きているものだけで6綱2万～2万5千種が知られている。大型のえび、やどかり、かに、しゃこなどの仲間は、原始の時代から食料源として、私達の生活と密接なかかわりをもってきた。おいしくて経済価値が高い水産物だけでなく、美しい色彩や面白い習性から、海浜の散歩や磯遊びで親しまれている種類が多いから、郵便切手の図柄として使われることが少なくない。ことに1960年代後半から印刷技術の進歩と相まって、新たに独立した旧植民地や遠隔の大洋島で、切手愛好家用とも見られるような多色刷りの切手が次々に発行されるようになって、甲殻類の切手は急に数を増した。

パリやアムステルダムでは、日曜日になると街の公園で朝から切手市が開かれる。同好の人達がマロニエの木蔭のベンチで話したり、露店に並べられた切手帳を眺めたりして静かな休日を送っている様子は、人々の歴史のある日常生活だけが醸し出す、落ち着いた、和やかな風景である。残念なことながら、この趣味の文化を見るような雰囲気は日本のどこにもないようだ。私の切手集めは、たまたま海外の知人からの封書に動物を描いた切手が貼られていると切り取ったり、旅先で見つけた一揃いを買って求めたりする程度のものだが、外国に滞在している時には、時々そんな場所に出かけて、くつろいだ一時を送った。切手を通じて異国の人たちと挨拶を交したり、コレクションを見せてもらったりすることが、会議で疲れた頭の休養になったし、ちょっぴり土地っ子

になったような気分も味わえて楽しかった。

何となく自然に集まってきたような郵便切手をあらためて眺めてみると、一枚一枚にそれを呉れた人の面影や街のたたずまいが目にかぶし、時には蝦や蟹が棲む遙かな海の風や小島に躍る陽光を感じることもある。折々にそれぞれの切手の図柄や種類を判じたり、発行の意味や理由を調べたりして書きとめておいたメモを整理し、いくつかの分類群ごとにそれらの生態や私達との結びつきを語り、いわば切手を材料に蝦や蟹の自然誌という形にまとめたのがこの本である。一辺数センチメートルにすぎない郵便切手が、波立つ青い大海原や静かな山のせせらぎと、そこにみられる驚くほど多様な生命の世界へのいざないとなれば著者にとって大変うれしいことである。



目 次

はじめに	3
1. 甲殻類の郵便切手と分類学	11
2. 最初の甲殻類切手	17
3. カメノテとフジツボ (ミョウガガイ科・フジツボ科)	19
4. ナンキョクオキアミ (オキアミ科)	21
5. クルマエビの仲間 (クルマエビ科)	23
a. インド・西太平洋のクルマエビ類 (25)	
b. 大西洋と東太平洋のクルマエビ類 (27)	
c. 蝦の背わた (29)	
6. チヒロエビの仲間 (チヒロエビ科)	30
7. オトヒメエビ (オトヒメエビ科)	32
8. さんご礁の色鮮やかな忍者たち (サラサエビ科・ヨコシマエビ科・アナエビ科)	33
9. テナガエビの仲間 (テナガエビ科)	35
a. 青いアオザイ (35)	
b. 大きい卵と小さい卵 (36)	
10. ホッコクアカエビ (タラバエビ科)	39
11. ザリガニの仲間 (ザリガニ科・ミナミザリガニ科)	41
a. フランス料理のエクルビス (43)	

b. ミナミザリガニ (44)	
12. アカザエビの仲間 (アカザエビ科)	46
a. ヨーロッパの味 (46)	
b. オマール (48)	
13. イセエビの仲間 (イセエビ科)	50
a. 海 の 翁 (52)	
b. 海 流 の 道 (53)	
c. 赤いせえびと青いせえび (54)	
d. アメリカイセエビの行進 (55)	
e. ブルターニュのラングスト (57)	
f. 南の冷たい海の美果 (58)	
14. 泥底に潜む異相の生物たち (セミエビ科・センジュエビ科)	60
15. やどかりの仲間 (ヤドカリ科・オカヤドカリ科)	63
a. 磯の人気者たち (65)	
b. ヤ シ ガ ニ (67)	
16. タラバガニ (タラバガニ科)	69
17. アサヒガニ (アサヒガニ科)	71
18. カラッパの仲間 (カラッパ科)	71
19. クモガニの仲間 (クモガニ科)	74
a. ズワイガニ (74)	
b. タカアシガニ (76)	
c. ハサミは雄大 (77)	
20. テナガヒシガニ (ヒシガニ科)	79

21. ケガニ (クリガニ科)	80
22. ヨーロッパイチョウガニ (イチョウガニ科)	81
23. ガザミの仲間 (ガザミ科)	83
a. 江戸前の味 (84)	
b. 脱皮と自割とクッキング (86)	
c. アンコナのブイヤベース (89)	
24. オウギガニの仲間 (オウギガニ科)	91
a. 変化に富む種類 (91)	
b. 名画になった蟹 (93)	
c. 毒の蟹 (94)	
25. イワガニの仲間 (オカガニ科・イワガニ科・ ミナミコメツキガニ科)	96
a. 陸に上がった蟹たち (96)	
b. 土手くずし (98)	
c. アセンション島のイワガニ (101)	
d. 木に登る蟹 (102)	
e. ミナミコメツキガニ (104)	
26. スナガニの仲間 (スナガニ科)	104
a. けわしい恋の道 (105)	
b. しおまねきの大鯨 (106)	
c. ゆうれい蟹 (108)	
27. サワガニの仲間 (サワガニ科)	110
28. シャコの仲間 (シャコ科・トラフシャコ科)	112

29. 癌と蟹の切手	114
30. 黄道十二宮と蟹の切手	117
おわりに	119
甲殻類の切手チェックリスト (1870～1983年)	121
索引	143

蝦 と 蟹

1. 甲殻類の郵便切手と分類学

郵便切手に描かれた動物や植物の名前を知ることは、切手を集める人々の楽しい仕事であろうが、これは実際には大変厄介なことである。実物の標本があっても、種の同定には沢山の文献と専門的な知識が必要だし、多くの場合は体の特別な部分の詳細な形態を調べなければ本当のところはわからない。だから小さい紙の上の、さらに小さい絵だけから種を決めようというのはきわめて乱暴な話である。

しかし、幸いなことに、永年実物をみて分類の経験を積み重ねると、前に見たことのある種類なら直感的にわかることがある。郵便切手に出てくるような甲殻類は大体がその地方でよく知られている代表的な種類であるから、それらをまとめた専門書や図鑑にあたれば、どんな種かの推定はできるし、切手には学名やその地方での呼び名が書かれていることも少なくないから、ある程度の手がかりは得られる。ところが、実際には学名が違っていたり、切手に書かれている名前と絵とが合っていなかったり、信用のおけないものがきわめて多い。したがって、そういった方法で名前を調べるより、絵から種類を判定するにはその種を見たことのある人の“勘”に頼る方が正確な場合が少なくない。これは切手集めで得た私の体験である。都合のよいことに甲殻類の分類学者は世界のあちこちで活躍していて、特定の動物群や、ある地方の種について大変豊富な知識をもっているのです。私の見たことのない種の同定には、彼らの勘を大いにはたらかせてもらった。

本書では切手の甲殻類の名前は次のような基準で表わすことにした。

1. 絵から種が明らかな場合は、切手の名前とかかわりなく、正しい学名を使う。
2. 絵から特定の種を決めることはできないが、切手に書かれている名の種としても間違いではない場合にはその名を用いる。
3. 絵が不確かで種名が記されていない切手でも、絵の出典が明らかで、それから種がわかる場合にはその名を採用する。
4. 絵が図案化されているか不正確で、種名も書かれていない場合で、科か属までは同定でき、切手を発行した国にはその科あるいは属の動物が1種しかいない時にはその名を用いる。
5. 以上のどれにも入らない場合、つまり種類を決める手がかりのない切手は同定不可能とし、できるだけ科または属までを明らかにする。

さて、世界にさきがけて郵便制度を近代化したイギリスは、1840年にビクトリア女王の肖像を描いた黒色の1ペニー切手を発行した。今日ブラックペニーとよばれる、この世界最初の切手はその後各国で発行された切手の雛型になった。このため初期の郵便切手にはそれぞれの国の王や君主の肖像を描いたものが圧倒的に多い。しかし、やがて肖像以外のテーマが切手に用いられるようになり、動物や植物、それに風景や乗物の切手が増えてきた。

甲殻類が最初に切手に現われたのは1870年で、この切手はロシアの地方郵便で使われた。以後、蝦や蟹がついた切手は世界の各地から430種ほどが発行されており、最近では毎年10種以上の新顔が加わるようになった。もっとも、そ



セントクリストファー・ネビス (1978)

の中には観光みやげや収集家のみに発行され、切手市場で“ラベル”とよばれる曖昧な切手もいくつか混じっている。

甲殻類の切手には大きくわけて5種類ある。1は蝦や蟹が主題になっている切手で、多くの場合、属か種まで同定することができる。2は主題が別あって、その一部またはまわりに蝦や蟹が小さく描かれているもので、いくつかについてはある程度まで種や属がわかる。3は特定の蝦や蟹を意味しない絵で、食糧の日や水産物輸出振興などのために発行された切手に多い。4は紋章や貨幣の絵柄に使われたり名画に描かれた甲殻類で、絵だけでは無理だが、絵の由来を調べれば種類がはっきりするものがある。5は癌制圧の目的で発行されるキャンペーン切手や、星座や黄道十二宮を表わす切手に使われる絵で、これもきまった種をさすものではない。

1983年末までの郵便切手に描かれた甲殻類が属する科の名と系統分類学上のそれぞれの位置関係を表に示した。このように切手に出てくるものでは蝦や蟹などが含まれる十脚目が圧倒的に多い。つまり、甲殻類の切手は蝦や蟹の切手といってよいだろう。そこで本書では必ずしも甲殻類の進化系統の順序には従わないで、十脚類を中心にとり上げて自由に話を進めることにするが、その前に2つの事柄について説明しておきたい。

まず、種の名前についてである。日本の海にいる甲殻類のうち、比較的良好に知られている種類にはすべて和名がつけられている。また最近では外国の海で



上からパキスタン (1983)、ジャージー (1982)、ニジェール (1975)

